

テーマ：地域包括ケア時代の内服セーフティ・マネージメント

—在宅の視点を重視した医療安全管理部の取り組み—

施設名：鳥取大学医学部附属病院 氏名：大東美佐子

### 【概要】

鳥取大学医学部附属病院は、全国で最も人口が少ない上、高齢化が進んでいる鳥取県唯一の特定機能病院である。在宅復帰率は92%で患者はほぼ在宅に戻っている。中には一人暮らしや老々介護で生活をされ、不適切な内服管理のために再入院を繰り返し、重症化する患者も少なくない。これまではGRMとして、最も多い内服インシデントの件数をいかに減少させるかに注目してきた。しかし、地域の中核病院として行われた医療が途絶えないよう、入院中より在宅に繋がる内服管理ができるよう患者に関わることの重要性に気づかされた。患者家族が短い入院期間中に自宅でも継続できる内服方法が獲得できるまでに見届ける体制ができれば、患者は安心して地域で生活できると考える。そのためには、自宅で生活する患者の視点に立った医療者の意識の変革が必要であると考え、看護師長を始め、医療安全リンクナース会を通して、自宅でも継続できる内服管理方法（内服管理テンプレートなど）を構築するために取り組んだ。その結果、インシデント発生後も自己管理が継続できるように患者と共に考える事例が増加した。さらに、来年度4月に薬剤師GRMの誕生をチャンスと捉え、医療安全管理部の看護師GRMとして、薬剤部・医師・看護部間をつなぐキーパーソンとなり、この体制が整備できるよう役割を果たしていきたい。

### 【背景】

鳥取大学医学部附属病院は、全国で最も人口が少ない上、高齢化が進んでいる鳥取県唯一の特定機能病院である。在宅復帰率は92%で患者はほぼ在宅に戻っている。中には一人暮らしや老々介護で生活をされ、不適切な内服管理のために再入院を繰り返し、重症化する患者も少なくない。これまではGRMとして、最も多い内服インシデントの件数をいかに減少させるかに注目してきた。しかし、地域の中核病院として行われた医療が途絶えないよう、入院中より在宅に繋がる内服管理ができるよう患者に関わることの重要性に気づかされた。患者家族が短い入院期間中に自宅でも継続できる内服方法が獲得できるまでに見届ける体制ができれば、患者は安心して地域で生活できると考える。そのためには、自宅で生活する患者の視点に立った医療者の意識の変革がまず求められる。さらに来年度4月に薬剤師GRMの誕生をチャンスと捉え、医療安全管理部の看護師GRMとして、薬剤部・医師・看護部間をつなぐキーパーソンとなり、この体制が整備できるよう役割を果たしていきたいと考えた。

### 【実践計画】

1. 「当院がこれからの地域医療に求められる内服管理の在り方」を看護部、医療安全リンクナース会、薬剤部に説明し、医療者の意識の変革を図る（H28年10月）。
2. 自宅でも継続できる内服管理方法を試行する：医療安全リンクナース会を通して実施（H28年12月）
3. 病棟薬剤業務実施加算1の病棟配置の薬剤師の業務の拡大を図る（H29年4月）。

平成29年4月に誕生する薬剤師GRMと共に、患者の内服管理の評価、配薬後の患者指導、インシデント分析と再発予防策の検討、勉強会の実施など病棟薬剤師と協働できるよう検討する。

## 【結果】

1. 入院中より自宅でも継続できる内服管理方法を提供することが、これからの地域包括ケア時代に求められている医療であり、その重要性について看護部会議、医療安全リンクナース会、薬剤部副部長へ説明し、意識の変革に取り組んだ（H28年10月）。
2. 次に医療安全リンクナース会を通してその実践に取り組んだ。
  - ① 従来の患者カルテ内の「内服自己管理アセスメント」にて、内服自己管理か病棟管理を決定する。
  - ② 新たに「内服管理テンプレート」を記載し、患者個々にあった内服管理方法の選択を行った。自己管理、病棟管理のみならず、患者個々に応じて、内服前の準備から確認・殻の確認・残薬の確認（毎回、1日分、処方日の1週間に1度）を決定した。
  - ③ その際自宅でそのまま使用できる内服管理用具（配薬ケース・カレンダー）を患者と相談し、採用した。現在配薬ケースについては、安価で購入しやすいものを業者と共同制作中である（H29年3月まで）。
  - ④ 入院から3日間「内服自己管理確認表」を活用して、上記の内服管理方法で飲み忘れがないか、チェックを行った。

実際に、全病棟での「内服管理テンプレート」の活用状況は12月99件、1月130件と増加していた。実際の内服に関するインシデント件数についての変化はなかった（昨年比-3件）。内服インシデント件数の内訳は昨年度と比較し、自己管理は7%増加、病棟管理は6%減少した。しかし、インシデントが発生しても看護師による全面的な管理である病棟管理に変更するのではなく、自己管理が継続できるよう、再発防止策を講じた事例が増加していた。介入前の5ヶ月はインシデント総数の69%が、介入後の4ヶ月は93%と増加していた。

## 【評価及び今後の課題】

医療安全管理者としてインシデントの減少はもちろんであるが、それ以上に今迎えている地域包括ケア時代にあったセーフティ・マネジメントの視点を持つことの重要性に気づくことができた。そこで患者を取り巻く多職種の意識の変革が必要であると考え、理解が得られるよう、看護部会議・医療安全リンクナース会・薬剤部副部長へ説明し理解を求めた。

さらに、患者が入院中に、医療者の見守る中で、自宅でも安心・安全に継続できる内服管理方法を構築することを目標に、新たな「内服管理テンプレート」を導入した。この方法を導入するために医療安全リンクナース会を通して取り組んだ。その結果、インシデント件数は増加したものの、インシデント発生後も自己管理が継続できるよう、患者と共に考え、再発防止策を講じていた内容のインシデントレポートの報告件数も増加した。最終実施者である看護師の意識の変化の現れととらえ、成果を感じられた。

現在は、病棟薬剤師のマンパワー不足のため業務の拡大を図ることは難しく、今後誕生する薬剤師GRMと共にさらに自宅で安心・安全に内服できるよう、入院中より関わる体制の整備を図っていきたいと考える。